

引用文献

- 足立智孝. (2016). エンドオブライフにおける倫理的意思決定 バイオエシックスの観点からの展開について. 看護技術, 62 (12), 31-36.
- 蘆野吉和. (2015). 在宅緩和ケア総論. 在宅医療テキスト編集委員会 (編), 在宅医療テキスト第3版, (pp.149). 勇美記念財団.
- がん登録・統計. (2016). http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html
- 長谷川久巳. (2011). 意思決定を支えるケア. 梅田恵, 射場典子 (編), 緩和ケア 大切な生活・尊厳ある生をつなぐ技と心 (pp.154). 南江堂.
- 平原佐斗司. (2015). 多職種連携 (IPW) について. 在宅医療テキスト編集委員会 (編), 在宅医療テキスト第3版, (pp.38-39). 勇美記念財団
- 久松美佐子, 丹羽さよ子. (2011). 終末期がん患者の家族の不安への対処を支える要因. 日本看護科学学会誌, 31 (1), 58-67.
- Jonsen, A., Siegler, M., Winslade, W. (2006). 赤林朗, 蔵田伸雄, 児玉聡 (監訳), 臨床倫理学 第5版 臨床医学における倫理的決定のための実践的なアプローチ, 新興医学出版社.
- 片山陽子. (2016). アドバンス・ケア・プランニングの関連用語と概念定義. 西川満則, 長江弘子, 横江由理子 (編), 本人の意思を尊重する意思決定支援 (pp.3). 南山堂.
- 片山陽子. (2016). 看護師の意思決定支援: 文献にみる現状と課題 ⑥高齢がん患者の意思決定支援の特徴. 看護技術, 62 (12), 77-80.
- Kinoshita, H., Maeda, I., Morita T., Miyashita, M., Yamagishi, A., Shirahige, Y et al. (2015). Place of Death and the Differences in Patient Quality of Death and Dying and Caregiver Burden. *Journal of Clinical Oncology*, 33 (4), 357-363.
- 小島操子. (2008). 看護における危機理論・危機介入 改訂2版 (pp.85, pp.90). 金芳堂.
- 古瀬みどり (2013). 訪問看護師が終末期がん療養者ケアで感じた困難. 日本がん看護学会誌, 27 (1), 61-66.
- 厚生労働省. (2013). 緩和ケアに関する地域連携について (議論の整理)
http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000035g3x-att/2r98520000035g8g_1.pdf
- 厚生労働省. (2014). 終末期医療に関する意識調査等検討会報告書
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/iryuu/zaitaku/dl/h260425-01.pdf>

- 厚生労働省. (2015). 人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000078981.pdf>
- 蒔田寛子, (2010). 「在宅療養している終末期患者の QOL」の概念分析 Rodgers の概念
分析を使って. 日本看護医療学会雑誌, 12 (1), 39-47.
- 宮坂道夫, 田村恵子, 木澤義之. (2014). 倫理的側面. 日本緩和医療学会 (編), 専門家を
めざす人のための緩和医療学 (pp.20-21). 南江堂.
- Miyashita,M.,Sanjo,M.,Morita,T.,Hirai,K.,Uchitomi,Y. (2007). Good death in cancer
care: a nationwide quantitative study, *Annals of Oncology*, 18 (6). 1090-1097.
- Miyashita,M., Morita,T., Sato,K., Hirai,K., Shima,Y., Uchitomi,Y. (2008). Good Death
Inventory: A measure for evaluating good death from the bereaved family member's
perspective. *J Pain Symptom Manage*, 35 (5). 486-498.
- 宮下光令. (2010). 望ましい死の達成度と満足度の評価, 遺族によるホスピス・緩和ケアの
質の評価に関する研究. 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団/「遺族によるホスピス・
緩和ケアの質の評価に検する研究」運営委員会 (編), 遺族によるホスピス・緩和ケア
の質の評価に関する研究 2 (J-HOPE2) (pp.18-22). 日本ホスピス・緩和ケア研究振興
財団.
- 水島ゆかり, 浅見洋, (2007). 在宅で終末期をすごした高齢者の苦痛. 日本在宅ケア学会
誌, 11 (2), 57-64.
- 森山美和子. (1995). 家族看護モデル アセスメントと援助の手引き, 医学書院.
- 長江弘子. (2016). 「どう生きたいか」の価値を表出する支援としてのアドバンス・ケア・
プランニングの意義. 西川満則, 長江弘子, 横江由理子 (編), 本人の意思を尊重する
意思決定支援 (pp.12). 南山堂.
- 長戸和子. (2011). がん終末期の家族の特徴. 家族看護, 9 (1), 18-25.
- 中島朋子. (2013). 全人的苦痛の理解. コミュニティケア, 15 (13), 60-62.
- 日本ホスピス緩和ケア協会. (2010). ホスピス緩和ケアの歴史と定義.
<http://www.hpcj.org/what/definition.html> (検索日 2016年12月31日)
- 仁科聖子, 湯浅美千代, 小川妙子. (2008). 独居高齢者が在宅で最期を迎えるための訪問看
護師の援助, 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 2 (1), 50-56.
- 野嶋佐由美. (2005). 家族エンパワーメントをもたらす看護実践 (pp.8-9). へるす出版.
- 尾崎新. (1999). ゆらぐことのできる力 - ゆらぎと社会福祉実践, 誠信書房.

- 齊藤勇. (1996). イラストレート心理学入門 (pp.53-55). 誠信書房.
- Saunders,C et al. (1984). The philosophy of terminal care. Saunders,C (ed), The Management of Terminal Malignant Disease (pp.232-241). Arnold Publishers.
- Seow,H.,Barbera,L.,Sutradhar,R.,Howell,D.,Dudgeon,D.,Atzema,C et al. (2011). Trajectory of Performance Status and Symptom Scores for Patients With Cancer During the Last Six Months of Life, Journal of Clinical Oncology, 29 (9). 1151-1158.
- 志真泰夫. (2011). がん対策基本法とホスピス緩和ケア - 包括的がん医療と地域における緩和ケア提供体制
http://www.hospat.org/assets/templates/hospat/pdf/hakusyo_2011/2011_1.pdf
- Smith,E.,Nolen-Hoeksema,S.,Fredrickson,B.,Loftus,G., (2005). 内田一成 (監訳). ヒルガードの心理学 第14版 (pp.618-620). ブレーン社.
- 鈴木和子. (2012). 家族看護学とは何か. 鈴木和子, 渡辺裕子 (著), 家族看護学 理論と実践 第4版 (pp.5). 日本看護協会出版会.
- Temel ,J.S., ,Muzikansky, A., Greer, J.A.,Admane,S.,Jacson,V.A.,Dahlin,C.M.et al. (2010). Early palliative care for patients with metastatic non-small-cell lung cancer. New England Journal of Medicine, 363 (8), 733-742.
- 恒藤暁. (1999). 最新緩和医療学 (pp.1-10). 最新医学社.
- 鶴若麻理. (2011). 看護に必要な倫理原則の理解と活用. 梅田恵, 射場典子 (編), 緩和ケア 大切な生活・尊厳ある生をつなぐ技と心 (pp.41). 南江堂.
- 梅田恵. (2016). がん看護と看護倫理. 近藤まゆみ, 梅田恵 (編), がん看護の日常にある倫理 看護師が見逃さなかった13事例 (pp.31). 日本がん看護学会.
- 渡辺裕子. (2014). 看護における家族の定義. 渡辺裕子 (監修), 家族看護を基盤とした在宅看護論 I 概論編 第3版 (pp.99). 日本看護協会出版会.
- 渡辺裕子. (2014). 家族を理解するための基礎理論. 渡辺裕子 (監修), 家族看護を基盤とした在宅看護論 I 概論編 第3版 (pp.106-110). 日本看護協会出版会.
- WHO . (2002) . WHO Definition of Palliative Care
<http://www.who.int/cancer/palliative/definition/en/>
- 矢ヶ崎香. (2011). 緩和ケアにおけるチームアプローチ. 梅田恵, 射場典子 (編), 緩和ケア 大切な生活・尊厳ある生をつなぐ技と心 (pp.13). 南江堂.

柳原清子. (2008). がん患者の家族に起きている現象と家族ケアのあり方. 家族看護, 6(2), 6-10.

柳原清子. (2011). がん終末期における家族看護学の主要概念の整理と最新概念. 家族看護, 9 (1), 12.

米澤順子, 杉本正子, 新井優紀, リボウィッツよし子. (2014). 独居がん終末期患者の在宅緩和ケアにおける訪問看護師の支援と連携. *The Journal of Japan Academy of Health Science*, 17(2), 67-75.

参考文献

- 廣瀬清人, 菱沼典子, 印東桂子. (2008). マズローの基本的欲求の階層図への原典からの新解釈. 聖路加看護大学紀要, 35, 28-36.
- 小島操子, 佐藤禮子. (2011). 危機状況にある患者・家族の危機の分析と看護介入 事例集. 金芳堂.
- 森山美和子. (2001). ファミリーナーシングプラクティス 家族看護の理論と実践, 医学書院.
- 日本緩和医療学会. (2016). がん患者の呼吸器症状の緩和に関するガイドライン 2016 年版, 金原出版株式会社.
- 専門看護師の臨床推論研究会. (2015). 井部俊子, 大生定義 (監), 専門看護師の思考と実践, 医学書院.
- 恒藤暁, 内布敦子. (2007). 系統看護学講座 別巻 緩和ケア, 医学書院.
- 渡辺裕子. (1999). 家族看護学の基本的視座 一単位としての家族を看護ということ. 日本看護研究学会雑誌, 22 (2), 61-69.
- 柳原清子 (2008). 家族理論にもとづいた家族アセスメントの方法とそのポイント, 緩和医療学, 10 (4), 341-346.
- 在宅地域連携ガイド委員会. (2008). 緩和ケアのための地域連携ガイド. 厚生労働科学研究費補助金 (がん臨床研究事業) 「在宅医の早期参加による在宅緩和医療推進に関する研究」班.